桜ヶ丘だより

発　行
岐阜県立関高等学校
同窓会会長渡辺宣章

印　刷　所
ムトウプリント

翠松の如き母校に

学校長　川崎立夫

大正十年三月に開校した我が関高校は激動の昭和時代を経て平成の世まで六十七年の間、当地区の学問の府として育ってきました。卒業生は旧制武儀高等女学校の時代二九六九名を含めると今年三月巣立つ者をいれて一五二五〇名にのぼる大きな組織になりました。関高校及びその同窓会は名実共に中濃地区の雄となり、卒業生の皆様には全国の各界で活躍しておられ、喜びにたえません。

本校は創立当初はもちろん、今日まで常に地域の熱い視線を浴びて参りました。ある者は当地にとどまり地域発展の原動力となりましたが、ある者は所を替えてそれぞれの地で活躍してきました。かくして地域社会の発展と共に青年達の雄飛の踏台としての役割を果してきたのであります。

校史六十七年は必ずしも長いとはいえませんが、その歩みは平坦な道ではなかったように思います。昭和初期の経済不況、男性のほとんどを戦場に送った銃後の守り、窮乏の戦後そして教育制度も女学校から高校へ、小学区制から大学区制さらに現在の中学区制へと目まぐるしく変動し、直接・間接に本校のあり方に影響がありました。その都度同窓会の方々にはよく母校を支え、難関を切り抜け、翠松と白梅をもって示す栄光ある関高校を築きあげて戴きました。

同窓生の方々には長い校史の中の三年間の在学は短いものですが、その一年一年は各自にとっては重要な一コマであり、学校にとっては輝く伝統の礎となったのであります。

呉子に「保業守成」という言葉があります。先輩が理想に燃え営々と努力し成果を上げられたことを継承し、守り育てて益々繁栄させるということのようですが、守ることだけに汲々としていては後退になりかねません。あくまでも「守成」で良き伝統を守ると共に常に生新な活力を持ち続けたいと思います。明日の関高校をどんな姿にするかは現在及び将来の在校生・職員それに同窓生にかけられた大きな課題でありましょう。

古来山紫水明の地には偉人傑物が輩出するといわれます。環境は人をつくるし、人が環境をつくることも事実です。この彩雲匂う桜ヶ丘という環境は同窓生諸氏に豊かな心を植えつけたと信じます。地と血、そして人のつながりは人間形成に有機的に密着しているものです。

職員一同は進取・至誠・錬磨の校訓をもとに後輩生徒を指導し、輝く伝統に一層の光を添えるべく努力していますので、諸氏の御支援をお願い致します。

七十周年に向けて

同窓会長　渡辺宣章

いよいよ二年後平成三年に、わが母校が創立七十周年を迎えます。

その記念行事実行準備委員会の総意で第二回卒業生の炭竈利夫先輩（現炭竈刃物製作所社長）に記念行事実行委員長に御就任いただくことの快諾をえて、これからその準備に同窓会・ＰＴＡ・学校が三者一体となって邁進します。

同窓会としては「意義ある記念行事」を目指して、実行委員長を中心に対応する所存ですが、多方面の御意見を反映させていきたいと思っておりますので、同窓会会員の方には委員会組織等にも積極的に参加し、御意見をお聞かせ下さい。

また昨年の五月の総会で二年ごとに行う総会の年に通常費を納入していただくよう決議されました。今までは入学生の納入する百二十万円が同窓会運営の資金でしたが、同窓会会員が一万五千人となり、同窓会の積極的活動に支障をきたす事態となったからです。こうした動きの中で会員の皆様には多大の御理解をいただき、納入概況は、平成元年一月中旬までで、約三千八百人、七百五十万円となりました。現在も継続して一日に数名が納入していただいております。納入率は約三〇％です。

皆様に厚くお礼を申し上げるとともに、有意義な利用方法を現在検討中です。

なお、連絡のとれない会員は約二千名を数えます。同窓生一万五千人が手を携えて団結し、同窓会活動が活発になるよう祈っておりますので、横のつながりも密にし、各クラスや学年の同窓会名簿や近況等も本部へ連絡して下さい。

最後になりましたが、同窓会会員の皆様方のますますの御健勝と御繁栄をお祈り申し上げます。

今年度卒業生の進路状況

―進路指導部―

【就職関係】

景気の安定で求人状況は好調でしたが、技能系での求人が多く、本校生の志望の多い事務系職種の求人はＯ・Ａ化の影響と短大・専門学校卒者との競合で年々減少の傾向にあります。本校では事務系求人も昨年並にいただき、就職志望者が男子11名、女子20名ということもあって、現時点では志望者全員が一応満足できる内定先を得ています。これも先輩諸氏の社会での活躍のたまものと感謝しています。本年も公務員関係は厳しかったようですが、63名受験し17名が合格しました。（昨年9/42名）

就職して社会に出る卒業生に対して先輩各位の温かいご指導とご鞭撻をお願いいしします。

【進学関係】

共通一次始まって以来初めての理科選択科目で得点の修正を行い、受験生に大きな動揺を与えた後味の悪い最後の共通一次試験でした。本校では過去最高の193名が岐阜大学で受験し、五教科総合平均点は昨年を下回りました。昨年同様自己採点後の二次出願のため、各大学でのボーダー前後の激戦が予想されます。全国的視野に立って二次出願し、二月二八日、三月五日の二次試験に向けて頑張っています。

この稿の時点では、私大入試が最っ盛りで、三年生諸君は全国各地で奮闘中です。一方連日新聞紙上に合格発表が載っていますが、推薦入試の結果や現在までの発表分から見ると中堅以下の私大（特に文系学部）が予想以上に難化しそうです。かつての大学のイメージは全く通用しなくなっております。看護医療関係の学校も難化が目立ちますが、本校生は大変健闘しています。生徒諸君も緊張感をもって最後まで志望達成に向けて頑張っています。

先輩各位の熱いご声援をお願いします。

昭和63年度卒業記念品について

卒業生の好意により毎年本校も整備され、校庭の広さと相俟って、県下でも環境整備において有数な高校となってきました。

今年の卒業記念品として学校の要望もあり、体育館の古くなった放送器機に替え、新しい音響設備を贈ることになりました。今までは、体育館の集会等において雑音や音切れが出ており、大変聞き苦しいものでしたが、これでこういった心配は解消されることでしょう。また、モノラルからステレオ用のアンプに替えましたので、文化祭や他の行事等で、その素晴らしい音響効果を発揮してくれることと思われます。

新会員のクラス委員決まる

同窓会入会式を終えた新会員四一一名のお世話をしていただくクラス委員が次のように決まりました。（敬称略）

三年一組　森本晃弘　山田　保
二組　河合　典子　河村　茂
田中　深雪
三組　石原　千尋　村山　孝司
田中　紀貴　猪又　美香
四組　辻　英樹　美樹
五組　○中島　浩之　古田
六組　小木曽美有紀　相宮　崇
七組　番　衣薫子
八組○竹田　健　清水　祐子
九組　足立　博　川島　愛子

○印は第41回生の幹事です。よろしくお願いします。

第24回コーラス部 第19回吹奏楽部 合同
定期演奏会
3月25日(土)　PM6:00～8:30
関市文化会館大ホール

演劇部発表会
3月30日(木)　PM2:00
関市文化会館小ホール
『夢のつづきのそのまたつづき』

会費納入のお願い

関高同窓会の会員も一万五千名になんなんとし、二年後には創立七十周年を控え、これを契機に関高同窓生の絆をより強め、同窓会活動の活性化を図るために、総会で同窓会の年会費二千円（二年分）を納めていただくことが決議されました。

「桜ヶ丘だより」を全員に配布するだけで一回に百五十万円の費用がかかるのです。

まだ、未納の方は、ぜひ、最寄りの金融機関に会費二千円を振り込んでいただきたいと思いますので、宜しくお願い申し上げます。

おくやみ

御冥福をお祈りします

井上　猛　先生

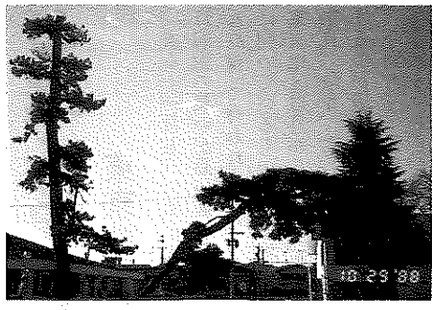
平成元年二月六日京都市山科の自宅で逝去されました。
六十五歳。
昭和十八年～二十一年本校教諭。
その後、滋賀大学教育学部教授として御活躍されました。

ら…。と考えるだけで私の女学生時代までが切りとられてしまうような気持です。

背の高い松は、十一月三日の運動会には万国旗をしばりつけ、ブカブカのブルマー姿で思い切りとびまわった姿を高い所でしっかり見ていたはずです。

大正、昭和、平成の三世代を生きていく私なのです。松はそれ以前から生きているのですもの、止むを得ない事かもしれません。しかし、あの松だけは、平成時代を元気をとりもどして、もっと生きてほしいと祈念せずにはいられません。

松よ最後の力をふりしぼってもっと生きて下さい。これが私の心からのねがいです。



はらぺこ女学生

木股倫子（武儀高女25回生）

昭和二十三年三月二十四日、県立武儀高等女学校最後の卒業式が私達二十五回生二百十五名の巣立ちの日でした。あれから四十年、長くて短い年月が過ぎ去り、いつの間にか孫の成長を見守るような年令になりました。

記憶も朧になり始めた今こそあの価値観がひっくり返った戦後の原点に立ち、自分史を見直してみることは、残された人生を生きてゆく上で意義のある事と考え、皆で協力して昨年、小さな文集を作りました。題して「はらぺこ女学生」

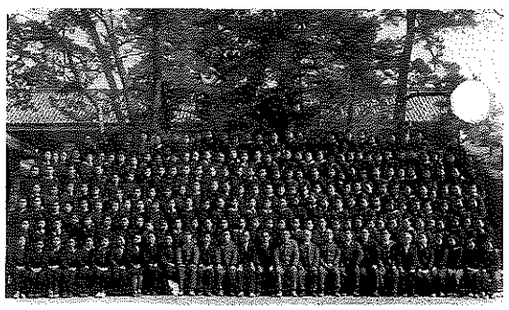
集った九十五枚の葉書には、ひもじかった事、風船爆弾の紙貼り作業、勤労奉仕の農作業、疎開転出入の事など辛かった思い出と共に、教材をはじめ総てが乏しい時代だったのに実に心豊かな教育を受けた思い出が多く書かれていました。食物も不足し生きるのがやっとだった時期、そして教育の理念が覆され混乱していた時期にも係らず、私達の受けた熱い教育は今も皆の中に生き続けていました。そして私達の人間形成の基盤となっていたのです。現在の立派な高等学校と比べると本当に小さな学校でしたが、多感な少女期を過したあの学舎（まなびや）は私達の青春の原点だったのです。

昨年八月、十余年ぶりに開いた同窓会は、恩師御二方の御出席をいただき参加者九十名の盛会でした。四十年ぶりに会う人もあり、会場は興奮の坩堝と化しました。生きていて良かった！

皆、十代の乙女に戻って旧交を暖め合いました。限られた時間では足りないと所を移して夜遅くまで語り合った人も多かったようです。

いつの時代にもそれなりに辛い試練を通過するのが人生でしょうが、思い出は美化されるので救われると誰かが書いていました。同じ思い出を持つ同級生は良いものです。前後の学年に比べて私達は物故者も一番多く、それだけに残った者が今後も仲良く、時に寄り合い、語り合ってゆきたいと思います。

師の恩、親の恩、友の恩に感謝して。



人物紹介

日本女性で初めてパリ・ダカール出場

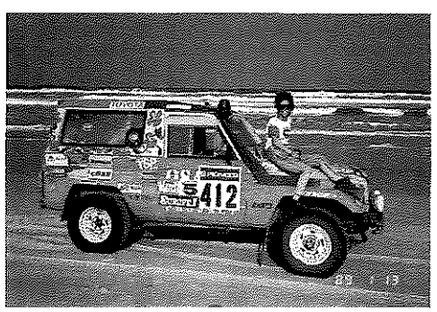
青柳（平田）暁子さん

兵庫県芦屋市
建築デザイナー

世界一過酷なラリーといわれる今年のパリ―ダカール（セネガル）レースに青柳さんは日本女性として初めて参加、四輪市販車改造クラスで見事二位になった。

二十二日間、一万キロ以上にもおよぶレースで、水が一滴もない日があったり、砂漠の真ん中で車が横転したり、睡眠時間は一日平均五時間、コンパスだけが頼りの過酷なレースだ。

きっかけは二年前、二人の娘さんとパリに旅行し、偶然パリ―ダカールレースに出くわし、地元の人に「あの人たちどこへ行くの」との問いに「サハラ砂漠さ」という魅惑的な答えだった。さっそく国際ライセンスを取得、芦屋市に持っていたギャラリーを売却し、資金を作った。

大阪市長から大阪のまちと来年開く「花と緑の博覧会」を紹介するメッセージを預かりパリ市長に届け、親善使節の役割も果たした。

まだまだ彼女の挑戦は来年も、また八月に開かれるオーストラリア「サファリ」へと続く。